

## 第4講 アンタルキダスの平和

### 和平への道

アテナイへの圧力を強め、アテナイを講和へと導く戦略をスパルタは取る。

前 389 年 アンタルキダス、艦隊を率いてエーゲ海東部に進出。

テレウティアスによるペイライエウス襲撃。

前 388 年 アンタルキダスとティリバゾスの会談。アンタルキダス、アテナイ艦隊の閉塞を破る。

アテナイの交易路を遮断→ペロポネソス戦争の悪夢を甦らせる。

ペルシアのアテナイへの不信の高まり：エウアゴラスやアコリスへの支援

### アテナイへの飴と鞭

在外領土の承認

スパルタとペルシアの連携による脅し

### Xen. *Hell.* 5. 1. 31-36:

「[31]アルタクセルクセス王はアジアにある諸都市や島嶼のうちクラズメナイとキュプロスは自らのものであり、その他のギリシア人系諸都市はレムノスやインブロス、スキュロスを除いて、小国も大国も自治である状態に置かれることが正しいと認める。尚これらは昔の通りアテナイ人のものである。もし何れか一方がこの平和条約を受諾しないのなら、それらに対して朕はこの平和条約を望む諸国と共に陸上部隊や海上においては艦船によって、さらには資材でもって戦うであろう。」

小アジア沿岸（イオニアを含む）とその付属水域にある島嶼部の帰属・・・

スパルタはすでにペロポネソス戦争後半において小アジアにおけるイオニアなどの諸地方のペルシア領帰属を認めている。

レムノスなどの島嶼部のアテナイ帰属を承認することでアテナイを他の

コリントス同盟諸国から切り離し、和平へと誘導する。  
平和条約の性格の変化・・・各交戦国間の個別条約ではなく、普遍的に適用される内容。

コイナー・エイレーネー

ペルシア王の武力と財力を背景に平和を強制

「[32]さて諸都市からの使節らは以上のことを耳にすると自分たちのそれぞれの都市に報告したのであった。その他の全ての都市は以上のことを批准すると誓約したのであったが、テーバイ人はボイオティア人を代表して誓約することを要求したのだった。王の勅書が述べているように、国の大小に関わりなく自主たるべきことという誓約をもし彼らが行わないのなら、誓約を受け取るわけにはいかないとアゲシラオスは述べたのであった。それでテーバイ人の使節らはそれが自分たちに命じられたものではないと発言した。それでは帰国して諸君は人々に、もしそれを実施しないのなら条約適用外になるだろうと、報告したまえとアゲシラオスは述べたのであった。それで彼らは立ち去ったのである。」

テーバイはボイオティアを代表して誓約することでボイオティアにおける覇権を確保しようとした。

アゲシラオスの発言はボイオティアにおけるテーバイの覇権を解体しようとする狙いがあった。これはコリントスとアルゴスとの合同国家の解体を主張する [34] と符合する。

「[33]アゲシラオスはテーバイ人に対する敵意故に躊躇することなく、直ちに犠牲をささげるようにエフォロス達に説いたのであった。国境越えの犠牲式が行われた後、テゲアに到着すると彼は騎兵部隊をペリオイコイ達の間で急がせるよう各方面に派遣し、クセナゴスらを諸都市に向けて派遣したのである。彼がテゲアから行動を開始する前に、テーバイ人が到着して諸都市を自主の状態にすると述べたのであった。このようにしてラケダイモン人らは故国へと帰国し、ボイオティア人の諸都市は自主状態になっ

たのである。」

スパルタ国境を越え、アルカディアに入って直ぐにあるテゲアがペロポネソス同盟軍の集結地であった。同盟諸国にはクセナゴスと呼ばれる渉外官が派遣された。

ボイオティアにおけるテーバイの覇権の解体

「[34]コリントス人はアルゴス人の守備隊を退去させようとしなかった。もしアルゴス人を退去させないのなら、そしてもし彼らがコリントスから退去しないのなら、彼らに対して戦争を仕掛けることになるだろうと、アゲシラオスは彼らに対して宣言したのである。両者ともに恐れをなし、アルゴス人は撤退してコリントス人の都市は独立を回復し、虐殺を主導した者たちやそれに加担したものたちは自主的にコリントスから立ち退いたのであった。残りの市民たちはかつて追放した者たちを意識して受け入れたのであった。」

コリントスとアルゴスの分離。民主派の亡命。亡命者の帰国。

コリントス人亡命者とスパルタ人政治指導者との関係。

コリントスへのスパルタの政治的影響力行使。

「[35]以上のことが行われ全ての都市は大王が送付した講和条約を受諾すると誓約した後、陸上部隊も海上部隊も解隊された。ラケダイモン人にもアテナイ人にもその同盟諸国にもこの様にしてアテナイにおいて市壁が解体された後の戦争の後、この最初の講和条約が締結されたのである。」

ギリシアにおける講和の性格。戦争前の状態への復元。領土併合などによる変更は生じない。外国軍の撤退と軍事施設の撤去。

「[36]戦争中は敵対陣営と均衡状態にあったラケダイモン人はアンタルキダスの平和と呼ばれる講和条約以降一層栄光の座を掛け登っていった。と

というのは大王から下された平和の守護者となり、自主の権利を諸都市に付与することによって、まさしくずっと以前から望んでいたように、コリントスを同盟国とし、ボイオティアの諸都市をテーバイ人から自立させ、もし彼らがコリントスから撤退しないならば、彼らに対して宣戦布告するとして、アルゴス人がコリントスを我がものとするのを終わらせたのであった。」

外交の力によってコリントス同盟を解体に追い込む。